

高
校
生
・
一
般
の
部

最優秀作

内閣総理大臣賞

宮崎県延岡市

星野^{ほしの}

有加里^{ゆかり}（教員 四十歳代）

黄金色^{こがねいろ}の背中

「今日、免許を返納してくるよ」

朝一番、きつぱりとした口調とは裏腹な淋しげな瞳で父が告げた時、寝惚^{まなこ}け眼の私は一瞬で覚醒した。珈琲を飲んでいた母も吹き出さんばかりに目をまん丸く見開く。この数年、母と私が待ち続けた父の台詞だったから……。

車が好きで、運転が大好きな父。幼い頃から父の運転で家族旅行に沢山出掛けた。私が成長し、免許を取って運転し始めても、父は変わらず家族旅行でハンドルを譲らなかつた。

「俺は、免許の返納なんか一生しないぞ。免許を奪われるぐらいなら、死んだ方がマシだ」

いつも鼻息荒く豪語していた父。実際父の運転は族群に巧^{うま}く、かつ安全だった。他人の運転では眠れなかつた私も、父の車なら安心して熟睡できた。お蔭で私は歴代の彼氏の運転への採点が辛くなり、口喧嘩の火種が増えてしまった。……だが、この数年、徐々に父の運転に不安を覚え始めた。赤信号で直進しかけたり、前の車にぶつけそうになったり、歩行者に気付かず危うく轢きそうになったり……。

父も既に傘寿間近。判断力も瞬発力も視力も衰えたのだ。心配した私と母は、「パパ、取り返しがつかない事故を起こす前に、運転はもう卒業しようよ」と何度も説得した。だが、父は決して頷かなかつた。免許を返納する事は即ち、父の生き甲斐が奪われる事だったから。だから、せめて父が運転する際は、私も極力同乗するように努め、安全に気を配った。

だが、誰よりも父自身が自らの衰えを痛感していたのだ。だから、傘寿を前にけじめをつけ、七十九歳を迎えた今朝、父は宣言した。

「俺の危険な運転のせいで人様の大事な命を奪ってしまう方が、免許を奪われるよりも死んだ方がマシだつて事に気づいたんだ。いや、とつくに気付いていたけど、随分と遠回りして、やっと受け入れる心の準備ができたんだ」

父は晴れやかな顔で私と母に告げた。

「最後のドライブだ」と言つて、父は母と私を乗せ、免許センターまで愛車を運転した。

「パパ、今までお疲れ様でした！ ママと私をいっぱいドライブに連れてつてくれてありがとう。これからは私の番だよ！ 私がいつぱいいつぱいパパをドライブに連れてつてあげるからね！ まずは、帰りの運転は私に任せて！」

免許を返納した父を氣遣い、明るく労うと、

「三十年早い！ お前の運転は下手過ぎて、怖くて乗つてられん。……よーし、じゃあ今日からの俺の生き甲斐は、助手席に乗つてドライバー劣等生をビシバシ、特訓する事に決めた」

憎まれ口を返す父に、思わずムカッ！

……でも、まあ、『鬼教官』として新たな老後の生

き甲斐を見つけてくれたなら、それでよしとするか。……と父思ひの娘は寛大に許した。

帰りは、私の運転で黄昏の海岸ドライブ。

海へ降りると、両親は並んで浜辺に座つた。六十年の車人生の誇りだった金色免許を自主返納した父を寿ぐように、黄金色ゴールドの夕陽に照らし出されたその背中を私は誇らしく眺めた。

優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

滋賀県草津市

川那部かわなべ

友貴ともき

(会社員 三十歳代)

職場で交通事故ゼロを目指す

私の働いている職場では通勤時や社用車での事故が少なくありませんでした。

事故を起こした本人とは直接話をし、反省すべきは反省してもらい、注意を促しておりますが、職場全体での事故はなかなか減りません。

そこで、事故が起きるとミーティングを開き、どういう事故であったか、どうすれば防げたのかということと話し合い、事故を起こした本人以外にも広く交通安全を訴えかけました。

しかし、「かもしれない運転」をしましうとか「ハ

インリッヒの法則」が、などと熱弁をふるっても反応は薄く、頭の中では皆、事故や違反はいけなないと理解していても、心のどこかに「自分は気を付けているから大丈夫」だとか「今回事故を起こしたのは自分じゃないし」という意識があるのか、効果は限定的でした。

どうしても事故を減らしたい私は、私自身が事故防止の為に普段から意識して守っていることの中からわかりやすく簡単に実行出来ることを選んで、それを一度のミーティングにつき一つ挙げ、皆にも実践してもらうことにしました。

まず、指定場所での一時停止。この標識がある交差点ではその直前で一時停止をしなければなりません。街中で他の車を見ていると全然止まらず普通に通行していく車があったり、止まろうという意識はあるが速度をグッと落とすだけで、きちんと一時停止できていない車があったりします。一時停止とは完全に車輪が停止することをいい、そのことだけは、次回運転時より意識して絶対に守ってもらうようにしました。

次に取り上げたのは横断歩道を横断しようとしている人があれば、きちんと横断歩道手前で停車し、通行

させてあげるといふもの。これは歩行者等を気遣うマナー的なものではなく、道路交通法にも記されており、守らなければ違反となるのですが、これも守らない車両が少なくありません。「後続車両に迷惑がかかるかも」とか「自車が止まっても対向車が全然止まってくれない」等と色々意見もありましたが、ルールはルール、まずは我々だけでも守っていきましようと思いをかけ、実行していただきました。

この二つが特に効果覲面（しやめん）で、それ以降ピタッと事故が無くなりました。

どうやら、運転中に一時停止の標識を見る度に「ミラーテイングで言っていたな、ちゃんと止まらなきゃ」と思うそうで、横断歩道にしても然り、横断歩道を見る度にミラーテイングを思い出し歩行者等がないか確認する。：。そうやって場面を限定して具体的なテーマを決めて守ってもらうことによつて、法令順守にもつながりますし、交通安全を意識する頻度も増え、徐々に安全意識が体に根付いてきます。

事故をきっかけに安全運転に目覚める方もいらっしゃいます。これはこれで否定はしませんが、大きな

事故が起きてからでは遅いのです。事故を起こす前にどうすれば安全意識の向上が図れるのか、どうすれば安全運転に目覚めてもらえるのか、管理者としてこれからも考え続けていこうと思っております。

優秀作

文部科学大臣賞

鹿児島県霧島市

寺田^{てらだ}

優斗^{まさと}（高専生 十歳代）

私の原付運転記

今月原付の免許を取得し、私は新人ライダーとなりました。長期休みでアルバイトを頑張り、やつとの思いで買った原付。わくわくどきどきしながら乗った日の思いを、初心を忘れないために、ここに綴ってみました。

買った原付を押して持つて帰り、ナンバーの申請も自賠責の支払いも終わってやつと乗れる、と準備が整ったその日、いざ乗ろうとバイクにまたがったとたん、八分の興奮と二分の恐怖に襲われました。結局その日はそのままエンジンをかけることができず。部屋

に戻って学科試験前に何度も読んだ原付の参考書を読みふけりました。講習の時に見た、事故の様子を映したビデオのように、自分も事故を起こしてしまうのではないかと心配で、その日はなかなか寝つけませんでした。

次の日。まずはエンジンをかけ、家の周りを走ってみようと思いました。十キロもないぐらいのスピードでしたが、なんとか慣れることに成功し、そのまま三十分ぐらい家の回りを走っていたその時です。慣れが気の緩みにつながったのかもしれない。近所の方の車が曲がり角から出てきて、事故を起こしてしまいそうになりました。幸いお互い徐行運転だったので、ぶつかりはしませんでした。気を引き締めることができるとなりました。

そのままなかなか大きな通りに出る勇氣は持てず、家の周りを周回していました。しかしどんな車にもあるものです。ついに私の車にも、ガソリン切れの時がやってきました。ガソリンを入れなければ、もう走ることはできません。ガソリンスタンドに行くことを決意し、交差点へ向かいました。幸い交通量の少ない時

間帯で、勉強した通り交差点の直進も難なくクリア。ガソリンスタンドに着き、画面に表示されたアナウンスに従い、満タンにはできなかったものの、なんとかガソリンをゲットできました。後ろに二台待たせてしまった以外大成功です。ごめんなさい。そしてもう一つ、私を焦らせる事態が発生しました。なんと、幸か不幸かガソリンスタンドまでの道のりは、大通りに出たあとすべて左折で、初めての右折がガソリンスタンドの出口となつてしまったのです。出ようにも来たときより交通量が増え、行き交う車のエンジン音がさらに私を焦らせます。なかなか出られません。後ろにはまた二台待ち。泣きたくなりました。そんな時、右手から来た白い車が、止まってくださいました。すると、左側から来た車も止まってくださったのです。免許を取る時に、思いやる心が大切だ、と習いましたが、わざわざ道をあけてくださるとは思っていませんでした。何度も頭を下げて無事また道路に戻り、やつと思いで家までたどりつきました。その日はとても良く眠れました。

ここまで私が経験した事を書いてきましたが、バイ

クに乗り始めて早々に、運転をする上でとても大事な事をいくつも学んだような気がします。これから普通免許や普通二輪免許を取るつもりです。楽しく安全に運転するために、初心を忘れず、また時には振り返ってみたりが大事になつてくると思います。

私の住んでいる街が、もつと運転しやすい街になるように、安全運転、日々の運転技術の向上に努めていきたいと思えます。

佳作

警察庁交通局長賞

秋田県大仙市

佐藤 利男（農業 六十歳代）

今日も一日 交通安全

交通事故のない、安全で快適な地域社会の実現は私達一人一人の願いであります。しかし現実には、飲酒運転や暴走運転、あおり運転等による悲惨な交通事故のニュースが絶えることはありません。

交通安全運動は、人の命に直接に係わる重大な問題であるにもかかわらず、何故か行政でも、地域社会の中でも、他人事のように扱われている感じがして残念でなりません。

私達は、車に乗れば運転者であり、車から降りれば歩行者にも成ります。交通事故を防止するためには、

道路交通法などの法令で定められた交通ルールを守るだけではなくて、道路交通の場で、お互いが相手の立場を尊重して、優しさと思いやりを持った安全な優しい運転を、常に、どこでも実践していくことが大切だと思っています。

運転免許の更新講習を受講した際に貰った交通安全本の最後の頁に「安全運転五則」というルールが書かれています。それは、①安全速度を必ず守る。②カーブの手前でスピードを落とす。③交差点では必ず安全を確かめる。④一時停止で横断歩行者の安全を守る。⑤飲酒運転は絶対にしてはいけない。というルールです。この安全運転五則は、万人向けの安全運転の心構えとして、基本原則で正しく常に守るべきことが示されています。この安全運転五則が、人々の心を打ち、共感を与えて、個々の人々の心の芯に響くものとなるように、更新講習時に全員に対して配布するなどして、もつともつと強く訴え、働きかけていくべきだと思っています。

私は退職後、地域の小学校の通学路で交通安全の見守り活動をしています。毎日朝、約四十五分間、通学

路の交差点で交通誘導していますが、子どもたちが信号交差点の横断歩道を渡る時の運転者の対応は実に様々です。

子ども達との間隔にゆとりを持って、子どもたちが安心して渡れるように停車してくれる運転者がいる反面、誘導している私と子どもとの間に無理矢理割り込むように突っ込んでくる危ない運転者も時々います。秋田は、雪国ですので、人々の心も真つ白なはずですが、何故か悲しい運転をする人がいるのも現実です。とても残念です。

悲惨な交通事故は、ある日突然、何ひとつの前触れもなく、誰にでも起こり得ます。悲惨な交通事故に巻き込まれることの無いようにしていかなければ成りません。

私には、今孫が三人います。私は、この孫たちに恥ずかしいことだけは絶対にしない。と言う気持ちで運転し、歩いています。

私は自宅玄関に「今日も一日交通安全」の交通安全旗を掲げています。そして、毎日毎日「今日一日は、絶対に違反しません。絶対に事故を起こしません」と

いう思いを持って生活しています。

みんなで努力すれば、交通事故のない、安全で快適な車社会は実現することができると信じて「今日も一日交通安全」を実践しています。

福島県郡山市

須田すだ

陽菜はるな

(専門学校 高等課程生十歳代)

小さな予防

最近、学校への通学途中や買い物で外を歩いていると、とても気になることがある。それは、親子の歩き方だ。このごろ、子供と手を繋いで歩く親が少ないと、私はとても気になっている。駐車場や歩道などで、子供の手を離して歩いているのは非常に危険なこと、これは、誰でも分かる常識だと思っていたが、子供の手を繋いで歩く親を見るのが少ないと感じるのは私だけではないだろう。

私が、実際、駐車場で見掛けた親子は、荷物を片手に持ち、子供の前をスタスタと歩く親と、その後方を追いかけるように、時折走りながらついていく三才位の子供だった。駐車場という、いつ車が動いてもおかしくない場所で、前に子供を歩かせるならまだしも、手も繋がず目を離している光景を見た私は、驚きと不安に陥った。

私は、五人姉弟の一番上で、下の弟や妹達の世話をする事が多かった。外に出ると、道路や駐車場では特に気を付け、手を繋いで、弟や妹を護った。

子供の行動は、本当に計りしれない時もあるので、「いつも自分についてくる」という考えは、全く当てはまらない。子供の為にも親や周りの大人は、最大限気を配り、危険を排除しなければならぬ。

先日、おばあちゃんが子供を乗せる前に車を発進させて、それから車に子供を乗せているのを見て、私は、前に見たニュースを思い出した。そのニュースでは、お母さんやおじいちゃんや、子供を乗せる前に少し車を動かしてから子供を乗せるという、私が実際見た同じことをして子供を轢いてしまった悲しい事故だっ

た。

この様な悲しい事故は、車を運転する人、そして一緒に居る人々が危機管理意識が低いから生じるのではないかと私は思った。

誰でも、この行動をしたらどんな危険があるのかや、安全に行うにはどういう事を心掛けねばならないかを事前に考えてから行動すべきでしょう。

「ここで待っていて」「ここから動かないでね」と声を掛けたから大丈夫と思つて安心するのはとても危ないことだと思ふ。

子供だけに危険を回避させるのはとても難しいので、子供達に危険や安全について具体的に教えていくのと同時に、大人がしっかりと気配りしてルールやマナーに反しない運転をする事で、楽しい車社会にすれば良いと思ふ。

「大丈夫、大丈夫」というその安心感は、とんでもない事になって、簡単に覆される。子供がいつも同じ行動をすることを思っていない。

大人達は、その危険性を慎重に予測することで、「悲しい事故を防ぐことが出来る」ことを考えていただき

たい。

平和な生活をする為にも、みんなで大切な命を守り、幸せに過ごせる世の中を作っていきたい。

宮崎県宮崎市

池田 いけだ

恭我 きょうが
(高校生 十歳代)

助手席運転

「助手席の役目」私の家庭のルールの一つにこれがある。車を運転する上で一番重要な人物は運転手であるが、その隣に座る助手席の人もとても重要なのである。

私の母は、交通事故の経験がある。その時は、本当に一瞬の出来事で何も覚えていないと語る。そんな母は、

「とても注意して運転をしても、交通事故にあつてしまった。一人の注意力じゃ、交通事故は確実には避

けられない。」

と言った。そして、私の家庭では新たなルールが追加された。それが、「助手席の役目」である。助手席はただ一緒に行く人が座る席ではなく、運転手を助ける、サポートするという本来の正しい「助手席」の役目をするということだ。その内容はなかなかシビアなもので、例えば、曲がり角では右左の確認を一緒に行ったり、車間距離を意識し合ったりといろいろやらなければならぬことがある。このルールができてから、何かと忙しくはなったが、母が安心する、と喜び、また私にとつても将来車を所持する身としてとても勉強になることが多い。このようにとても良いルールだと実感している。

ある時、部活動の送迎で友達を乗せた。友人は私の行動に驚き、こう言った。

「なんか助手席の人も一緒になつて二人で運転してるみたい。」

そうか、とうとう「手助け」ではなく「運転」に見えるか。私もその発言に驚いた。「運転」に見えるまでに成長した私の「手助け」を自分自身で称賛した。

そのことを母に伝えると、母も嬉しがっており、「良かったね。初めはめんどくさいと思っただかもしれないけど、しつかり続けてきたからそうやって見られたんだよ。」

と言った。私は何ともいえない満足感を味わうことができた。

「助手席の役目」私の家庭で生まれたルールだが、もつと広まってほしい。交通事故にも、相手がいる場合がある。そんな相手側も「助手席の役目」を使っていたら、どうであろうか。このルールがあれば、一人でも多くの意見が出て、危険を察知することができるはずだ。助手席に座る人は、運転手と同等の責任感を持ち、しつかりと「手助け」の努力をする。そして、いつしかそれが「運転」へと変わり、共に注意し合えたら、安全は保障されると強く思う。

